

散文「悪魔の夜の錢鍾書先生訪問」試論

—作家の自己対話と西南聯合大学における錢鍾書—

杉 村 安幾子

1. 序——深夜の自己対話

夜は自省の時間帯である。暗さと静けさが人を思索に駆り立てるものらしい。魯迅の自省は散文詩「影的告別」に見出せる。

人が眠りにおちて時の消えるとき、影が別れを告げに来ては、こんなことをいう——

おれの気に入らぬものが天国にあるから、おれは行きたくない。おれの気に入らぬものが地獄にあるから、おれは行きたくない。おれの気に入らぬものがおまえたちの未来の黄金世界にあるから、おれは行きたくない。

だがおまえこそおれの気に入らぬものだ。⁽¹⁾

深夜、ひっそりと影がやって来て作者に語りかけるという形を取っているが、これは魯迅自身の心的世界で行われている自己対話であろう。この文章の執筆当時(1924年)、魯迅は様々な葛藤状態にあり、重い虚無感にとらわれる一方、その虚無感と闘わんと必死に抗ってこいた。この散文詩は、その暗く重い心情を「影」として表していると言える。

又、ゲーテの『ファウスト』第一幕において悪魔メフィストーフェレスがファウストの書斎に現れるのも夜である。ファウスト自身の「予感に富んだ神聖な畏怖をおぼえさせて、／われわれの中によりよい霊を喚びますところの／深い夜のとばりに包まれた／野辺や牧場をあとにしてきた」⁽²⁾との台詞に明示されている。又、第五幕でファウストのもとに四人の灰色の女たちが訪ねて来て、そのうちの一人「憂愁」が彼と問答をするのも深夜である。ファウストとメフィストーフェレスの会話、ファウストと「憂愁」の会話には、詩人ゲーテ

が『ファウスト』を全生涯をかけて創作したとされるだけあって、ゲーテ自身の思想と感情の溢れる内的世界が投影されていると見て間違いあるまい。

錢鍾書⁽³⁾はこの『ファウスト』の模倣のつもりであったのだろうか、悪魔が自らを訪ねて来るという散文「悪魔の夜の錢鍾書先生訪問」（原文：「魔鬼夜訪錢鍾書先生」以下「魔鬼夜訪」と略す）を発表した。以下は冒頭の一段である。

「本来ならば、あなたと私は互いにとっくに知り合っているべきだったのです」彼はそう言うと、火鉢に最も近い腰掛を選んで腰を下ろした。「私がまさに悪魔というやつです。あなたはかつて私の誘惑を受け、試されたことがあるのですよ」⁽⁴⁾

冒頭でいきなり悪魔が話しかけてきていることに、読者は些か困惑させられる。タイトルにある「魔鬼」は「悪魔」や「魔物」といった邪悪な存在を指すが、その魔鬼の訪問を受けるというのだから、この作品はフィクション⁽⁵⁾であるととらえるべきであろう。

さて、唐突に悪魔の訪問を受けた錢鍾書は、客人を迎える主人としての立場を思い出し、悪魔を歓迎すると、彼との会話を楽しみ始める。そこで彼らによって語られるのは、世事や人生観であった。ウィットとユーモアに満ちた彼らの対話は、一見一般論であるかのようにだが、その実、当時の特異な時代性や社会性、錢鍾書自身が置かれていた状況や彼の心境をも如実に表しているものとなっている。「魔鬼夜訪」執筆当時の1939年、錢鍾書は出身地である江蘇省無錫でも、出身大学のある北京でもなく、中国の内陸部である雲南省昆明にいた。錢鍾書自身は半年ほどしか昆明にはいなかったが、この時期、昆明にいた作家・知識人は錢鍾書以外にも数多くいる。彼らを昆明に呼んだのは西南聯合大学の存在であった。

西南聯合大学は歴史上既に姿を消し、中国現代史において特別な存在となっている。本稿では散文「魔鬼夜訪」を通して、当時の昆明の状況などをも見据えつつ、西南聯合大学時代の錢鍾書の思考のありようを考えてみたい。

2. 西南聯合大学と昆明での日々

1937年7月7日、北京郊外盧溝橋での日中両軍による軍事衝突に端を発し、日中全面戦争が始まった。35年から英国オックスフォード大学に公費留学していた錢鍾書は、この年の夏、B.Littの学位を得ると、妻楊絳と幼い娘錢瑗を連れ、次なる留学地フランスへ向っている⁶⁾。留学先はパリ大学であった。当初、学位取得を目的として渡仏したようであるが、後にこの目的は放棄している。これはイギリスでの学位取得のプレッシャーが大きかったために、パリでは少しのんびりしたいという錢鍾書自身の考えがあったようである。パリでの錢鍾書は、聴きたい授業を聴講した以外は、中国人の友人との交際、フランス文学を中心とする外国文学の読書に明け暮れた。執筆活動としては、旧体詩を書き、詩人陳衍との談話記録を『石語』としてまとめている。

しかし、戦争の激化が錢鍾書の留学生活に終止符を打たせた。戦線が拡大されていく中、祖国が侵略の憂き目を見ているにも関わらず、呑気に留学生活を送ることは出来ないという心情的な理由も大きかったであろうが、最大の原因は経済面での問題であった。錢鍾書の受けていた公費奨学金の年限は元々四年間であり、錢鍾書が二年で学位を得たために、残り二年分がフランス留学に回されるはずであった。しかし、戦争の開始とともに奨学金が給与されなくなったようなのである。38年、錢鍾書一家は帰国を余儀なくされた。

1938年秋にパリから帰国した錢鍾書は、香港から上陸し一路雲南省昆明へ向った。パリにおいて、母校国立清華大学の文学院院长である馮友蘭から清華大学外国語文学系の教授として招聘する旨の知らせを受けていたのである。元来清華大学は北京に拠点があった。錢鍾書が全く方向違いの昆明に向ったのは、以下のような時代状況を背景としている。

盧溝橋事件の勃発直後に北平（北京）が陥落。国民政府教育部は、国立清華大学、国立北京大学、天津の私立南開大学の当時の名門三大学に、合同して湖南省長沙に臨時大学を組織するように命じていた⁷⁾。37年10月、十七の学系（学科）を設けた国立長沙臨時大学が立ち上がるが、戦局が拡大し、同年12月13日南京が陥落。長沙臨時大学は、戦禍を逃れるために雲南省昆明への移

転を決定する。翌年1月には、大学当局は急遽冬期休暇に入り、3月からの春学期は昆明で開始する旨を学生・教職員に通知した。

同年4月2日、国立長沙臨時大学は国立西南聯合大学と改称。抗日戦争の長期化によって、結果として46年5月までの八年間、雲南省昆明に居を構え続けることになる。

錢鍾書は二十八歳の若き教授として、この西南聯大で教壇に立つことになったのである。その時期の西南聯大外国語文学系教員リストを見ると、教授として葉公超、陳福田、吳宓、朱光潜らがあり、副教授としては卞之琳の名が見える⁽⁸⁾。葉公超、吳宓は錢鍾書の清華大学時代の師でもあった。錢鍾書が具体的には38年のいつ頃昆明に到着したかはまだ詳らかにはされていないが、師でもあり同僚ともなった吳宓の38年11月29日の日記には「錢鍾書語る」⁽⁹⁾とある。吳宓の日記からは、この年、西南聯大が11月4日から秋学期を開始していることがわかるため、錢鍾書が秋学期開始前後には昆明に到着していたであろうことは特定できる。また、錢鍾書の寓居は現在の昆明市文化巷11号にあり、雲南大学の正門のそばであった。又、同じ四合院には雲南大学に勤めていた呂叔湘や施蛰存も住んでいた⁽¹⁰⁾。

当時、錢鍾書が担当した科目は「ヨーロッパの文芸復興」、「当代文学」、「一年生英語」であり、彼が教えた学生の中には、後に学者となった許国璋（北京外国語学院語言研究所所長）、王佐良（北京外国語学院教授、中国社会科学院外国文学研究所所長）、李賦寧（北京大学西語系教授）や、詩人・翻訳家として活躍した穆旦らがいた⁽¹¹⁾。当時の錢鍾書に関して、学生であった許淵沖（北京大学国際文化教授）の回想を見てみよう。

「一年生英語」は聯大一年生の学生（所属学科に関わらず）のための共通必修科目であり、私は錢先生のクラスでは唯一の外文系の学生であった。当時錢先生はやっと二十八歳、私よりも十一歳しか年長でなく、私の高校の英語の先生よりもまだ若かった。私の想像する大学教授とは皆、高齢でかつ徳の高い人であったため、不思議に思ったのだが、外文系の仲間に見尋ね、そこでやっと錢先生が清華大学文學院の有名な「三才子」のトップであり、残りの二人の才子が考古学者の夏鼐と歴史学者の吳晗であると知っ

たのだった。(中略)

銭先生は若者の気持ちをよくご存知で、四年生の例えば許国璋は銭先生よりたった五歳年下に過ぎなかったから、銭先生は授業時、大きな黒縁の眼鏡をかけ、濃い藍色のスーツに黒の革靴をお召しになっていた。そうすると年齢をいくらか年長に見せることができるのだ。「一年生英語」の授業中、銭先生は頭を上げて学生をご覧になっているよりも、首を垂れて本をご覧になっている時間の方が多く、両手を常に教卓の上で支え、左足は真っ直ぐに、右足は軽く曲げ、両足を交叉させると、右足の爪先で床を突いておいでだった。⁽¹²⁾

許淵沖の回想からは、銭鍾書が当時の西南聯大で注目の若手教師であったことや、銭鍾書がスーツや革靴といった外装で、実年齢よりも年長の落ち着きを表していたことが見て取れる。又、許淵沖は次のようにも回想している。

銭先生は授業中、中国語は話さず、英語しか話されませんでした。オックスフォード仕込の英語で、私達にイギリス音とアメリカ音が異なることを説明なさり、私達に標準的なロンドン発音を学ばせました。しかし、銭先生が私達に与えた印象で最も深いことと言ったら、「語不驚人死不休」(「言葉で人を感動させられなければ死んでも死に切れない」)の意。杜甫の詩「江上值水如海勢聊短述」に見える。：杉村注)です。授業中、多くの警句について話されましたよ。つまり、銭先生は私達に彼は何でも知っており、到底手の届かない高みにおられるということを感じさせたのです。⁽¹³⁾

高学年に対して開講されていた選択科目「ヨーロッパの文芸復興」、「当代文学」に関しては次のような回想がある。

授業に出ていた許国璋先輩はこう言われた。「一回の授業が、即ち一篇の素晴らしい文章であり、美的体験なんだ。」又、こうも言われた。「銭師は中国の大儒にして現世の通人なり。」⁽¹⁴⁾

これらの回想からは、年齢は当時の西南聯大の学生達と大きく異なりはしなかったものの、清華の「三才子」であり、イギリスおよびパリからの留学帰りであり、オックスフォード仕込の英語で授業をする銭鍾書が、学生達の畏敬と憧憬の対象であり、また授業中に彼らを圧倒していたことがわかる。

錢鍾書は昆明滞在中、西南聯大で授業をする以外に散文も発表した。清華大学在学中にも書評や散文を何篇か発表しているが、長篇小説『困城』に至るまでの錢鍾書の創作生涯の起点は昆明滞在時にあると言える。許淵沖は「錢先生が当時、現地の新聞・雑誌に発表した文章は、広く伝わり、影響が大きかった。」⁽¹⁵⁾と振り返っている。

1939年1月15日 冷屋隨筆之一 「文人を論ず」（『今日評論』週刊一卷三期）

同年2月5日 冷屋隨筆之二 「文盲を釈す」（『今日評論』週刊一卷六期）

同年4月2日 冷屋隨筆之三 「一つの偏見」（『今日評論』週刊一卷十四期）

同年5月28日 冷屋隨筆之四 「笑いについて」（『今日評論』週刊一卷二十二期）

掲載誌である『今日評論』は、1939年1月1日に創刊された。発行母体は西南聯合大学であり、国内外の時事問題から政治、経済、教育、文芸といった様々な分野に関する記事を載せた総合雑誌的な性格を有していた。主な内容は時事批評と文芸作品だったようである。錢鍾書以外には、朱自清、沈從文、潘光旦、呂叔湘、王力、葉公超、柳無忌、陳銓、嚴文井などが文章を発表した。上記の面々のうち、呂叔湘と嚴文井以外の面々は西南聯大の教師陣である。呂叔湘は当時雲南大学で教師であったため、昆明にいたが、嚴文井はおそらく延安にいたと思われる⁽¹⁶⁾。この時期、昆明の知識人の間で一定程度の影響力を持った『今日評論』は、1941年4月13日に百十四期を出して終刊となった⁽¹⁷⁾。

又、散文「魔鬼夜訪」は、錢鍾書が『中央日報』副刊に黙存の筆名で発表したとされている⁽¹⁸⁾が、明確な掲載年月日を記した資料は実はまだない。今後、詳しい調査が俟たれる。当時雲南において『中央日報』は、メディアとしては大きな存在であった。その背景としては、次のような経緯がある。国民党統治区においては、抗日戦争終結前後、厳しいメディア規制が敷かれていた。雑誌・新聞の類は、国民党によって接收あるいは買収されたり、終刊に追い込まれたりしたものが多い。国民党直系の新聞・雑誌が多くなり、新聞に関して言えば、十一種の『中央日報』、十三種の『民国日報』、十一種の『陣中日報』など、

合わせて二百余りもが国民党によってコントロールされていた。と言っても、これらの新聞全てが国民党よりの記事や文章ばかりを發表していた訳ではない⁽¹⁹⁾。例えば、『中央日報』昆明版は1939年5月15日に発行され、副刊は『平明』、『中央副刊』、『人生』、『文芸』、『語文』など数種があったが、編者には李何林や王力など進歩的な文学者や共産黨員もいたのである。抗戦期の『平明』の寄稿者には、沈從文、李広田、朱自清、聞一多、葉公超らがあり、『平明』の文芸的レベルは相対的にかなり高かったとの評価がある⁽²⁰⁾。更に、西南聯大の学生達も活躍を見せた。穆旦、杜運燮、趙瑞蕪、汪曾祺といった、後に中国文学史に名を連ねたり、学術界でビッグネームとなる面々が『平明』に自らの作品を發表していた。

以上、錢鍾書が籍をおいた西南聯合大学が、時代が生んだ特殊な大学でありながら、当時の著名な作家・学者が集っていたこと、またそれゆえに昆明のメディア・文化界が一種の活況を呈していたことを見てきたが、そうした中に身を置いていた錢鍾書はどのようなことを考え、何をどのように發表したのであろうか。

3. 錢鍾書 悪魔と対座する——悪魔の口を借りて語られる時代像と知識人観

「魔鬼夜訪」は1.で挙げたように、突然悪魔が現れ、語り手である「私」に話しかけてくるという冒頭部を有している。この悪魔は「何杯か酒を呑み過ぎましてね、酔眼朦朧、真っ暗な自分の家に帰ろうとしましたら、何と間違っあなたのお部屋に入ってしまったという訳なんですよ」と唐突な訪れの理由を説明している。彼は続けて語る。

内地の電灯ときたら全くひどいもんですな！あなたの家も真っ暗で、私のところの地獄と一緒にですよ！しかし、私のところよりずっと寒い。私のところでは一日中硫黄の火が燃えています、こちらでは勿論そんなこと出来ませんよね——炭の値段が又上がったらしいじゃないですか。

悪魔のこのセリフにある「内地の電灯」云々は、当時のご当地ネタとでも言うべきものであろう。例えば、西南聯大の男子学生寮に関する回想には次のよ

うにある。

八人一組でランプを共有していた。(中略)油も足りなかったし、自分勝手なクラスメートがこのひどく汚いランプを宝物のように自分の枕元に置くものだから、(寮の)寝室の暗さは押して知るべしだろう。(21)

又、「炭の値段」も同様に戦争を背景とした当時の生活状況を反映していると言える。

1938年に銭鍾書は「昆明舎館作」という四首の詩を作っており、その第二首は以下のようなものであった。

屋小檐深昼不明	屋 小さく 檐 深くして 昼 明るからず
板床支凳兀難平	板床支凳 兀として 平らかなり難し
蕭然四壁埃塵綉	蕭然たる四壁 埃塵の綉
百遍思君繞室行 ⁽²²⁾	百遍 君を思い 室を繞りて行く

詩の大意は次の通り。部屋は狭く、軒が深いため、昼ですら暗い。木のベッドや腰掛もゴツゴツとしていて座りにくい。家の中はがらんとして、物寂しい雰囲気は漂っており、カーテンは埃だらけである。遠く離れてしまった妻のことをひたすら考えながら、部屋の中をウロウロと歩き回っている。

この詩からは、銭鍾書が昆明の借家に対して何の愛着も温かみも感じていないことが読み取れよう。狭く暗い部屋という物質的条件への不満も勿論であるが、銭鍾書の当時の状況を慮れば、若くして妻や幼い娘(1938年当時一歳)と離れ、単身赴任していることへの寂しさや孤独感もあったであろう。

また、銭鍾書が『今日評論』に発表した四篇の散文「冷屋随筆」シリーズの「冷屋」とは、銭鍾書の寓居を指すものであった。これはシリーズの第一篇「文人を論ず」の発表の際に、「借家がひどく寒く、それゆえ“冷”と名付け、文章を書くのに何のこだわりもないので、それゆえ“随(なるがままにまかせること)”と名付けた。全て事実の記録である。よってここに引用した。」⁽²³⁾という一文を小序として付したに基づいている。これら銭鍾書自身の筆に拠るだけでも、彼が寓居や住環境に相当不満を覚えていたことは想像に難くない。だが、38年当時、西南聯大自体に独自の校舎がなく、町なかの会館や高校などの校舎を借りていた⁽²⁴⁾ことなどに鑑みれば、銭鍾書の寓居への不満は些か贅沢

なものではないだろうか。

同じ四合院の同じ階に住んでいたという施蛰存は「錢鍾書は学問はあったが、口がひどく悪く、他人を攻撃するのが好きだった。」と回想している⁽²⁵⁾。この回想は、施蛰存が当時の錢鍾書を好意的には見ていなかったことを示している。こうした見方は施蛰存だけのものではなく、清華大学の同級生であった呉組緝も学生時代の錢鍾書について、彼の博識教養には敬意を表しつつも、「彼は普通の人を見下しており、相手にしなかった。」⁽²⁶⁾と回想しており、錢鍾書が謙虚で親切な青年ではなかったことを明らかにしている。錢鍾書が寓居に感じていた暗さや寒さには、昆明の四合院において人間関係面が円滑でなかったことへの不満や不安も滲み出ていると言えるのではないだろうか。そう考えれば、「魔鬼」において悪魔が「いずれにしても、私は火に当たったところで暖まらないんですけれどね。(中略)かつて三日三晩オンドルに座っていたのに、それでも尻は窓の外に見える冬の晩のようにしっかりと冷たいままでしたから…」と言うのも、錢鍾書自身の現実の部屋の暗さや寒さよりも、心のうちの寒さを言ったと理解することができる。

部屋の話から、話題は文学観へと移っていく。二人の会話は、主に悪魔が語り、「私」が感心して悪魔を褒め称えたり、質問したりしながら進んでいく。悪魔は次のように言う。

今は新しい伝記文学の時代ですよ。他人のために伝記を書くことも自己表現の一種というわけで、自分自身の見解を書き入れたって構いません。他人を借りてきてテーマにし、自分自身を発揮させるんですよ。逆に言えば、自伝を書く人は往々にして自分には伝えるべきことなどないんですね。思うがままに、妻や息子ですらその人であると見分けられない人物像を描写してしまうとか、或いはデタラメにとりとめなく交遊録を書くものだから、別の人の逸事を書き伝えることになってしまったりとかね。ですから、あなたがもしある人自身についてお知りになりたかったら、その人が他の人について書いた伝記を読まねばならず、あなたが又別の人についてお知りになりたいのであれば、逆にその人が自分について書いた伝記を読まねばならないのです。自伝というのはつまり別伝なんですな。

これに対して、「私」は感心して「将来、あなたのその話を引用させて頂いても良いでしょうか？」と尋ねている。

悪魔のこの一段の伝記観には当然、伝記文学への皮肉が含まれている。伝記文学の歴史は古い。世界的に見れば、紀元前の古代ギリシャの伝記的著作にまで遡ることができるし、中国だけでも史伝を起源とする長い伝統がある。陶淵明『五柳先生伝』は託伝の形式を採っているが、描かれているのは自画像であるし、一つのテーマの下に個人の伝を集めた『烈女伝』や『高僧伝』といったものもある。近代以降も魯迅に『朝花夕拾』、郭沫若に『創造十年』、『北伐途次』などの自伝的著作があり、伝記の例は枚挙に暇がないほどである。こうした伝記に対して、「自伝を書く人は往々にして自分には伝えるべきことなどない」、「妻や息子ですらその人であると見分けられない人物像を描写」といった表現には、既成の伝記への嘲笑の含意があると言えよう。悪魔の口を借りてはいるが、これは当然、当時の銭鍾書自身の見解と見て間違いないだろう。

また、悪魔は次のように言う。

私は科学者に発明の話をすることも出来ますし、歴史家に考古学を語ることも出来ます。政治家には国際情勢を語り、展覧会では芸術鑑賞を談じ、酒の席では料理について話すことも出来ます。しかし、そうであっても私は時には科学者に政治を語り、考古学者に文芸を語りもするんです。と言うのは、どのみち彼らは何もわかっていませんから、これ幸いとばかりに他人の受け売りをしているって訳なんですよ。牛に琴を弾いて聞かせるのに、何の良い曲を選ぶ必要があるって言うんですか！

これも又痛烈な皮肉である。「どのみち彼らは何もわかっていませんから」、「牛に琴を弾いて聞かせるのに、何の良い曲を選ぶ必要があるって言うんですか」は、所謂科学者、歴史家、政治家、芸術方面の専門家などは、何もわかっていないと言っているに等しい。これも又、銭鍾書自身の考えだとすれば、ヨーロッパ留学帰りで大学教授の職にあったとは言え、当時弱冠二十八歳に過ぎない青年が述べるにしては、相当傲慢な態度であると言えるだろう。他の専門家や知識人に対する皮肉は続く。

私は時に牛の姿でも現れます。これもやはり一種の象徴でしてね。牛とい

うのは生贄にされるのに慣れてますでしょう。「自分が地獄に行かねば誰が行く」という精神を明示できるんですよ。それに、世のんびとはよくほらを吹き（原語：吹牛）ますがね、牛は決してそんなことはしないんですよ。少なくとも生理構造上、そうすることが出来ないんです。ですから私が牛の姿をするというのは、まさに謙遜の表れなんです。私はあなた方文人学者がニセ遠慮なさっているのとは大違いなんですよ。

悪魔が牛の姿をするのは謙遜の表れであるという説明に、文文学者の「ニセ遠慮」との比較をしているのが苦笑を誘う。ここには、錢鍾書が長篇小説『困城』など、その後も創作のテーマにし続ける知識人諷刺が見出せる⁽²⁷⁾。

悪魔の話題は戦争に移っていく。「私」が「全世界の新聞がみな戦争のことを言っています。このような時、あなたはそれ虐殺だ侵略だと、あなたの破壊芸術を發揮すべくお忙しいはずで、どうして忙中閑を盗んで私のところでお喋りをなさっているんです？」と問うと、悪魔は答える。

あなたは私が戦争に関与しているとおっしゃるが、そりゃあ全くの濡れ衣ってものですよ。私は性格が温和なんです。武力を用いるのには大反対ですし、条約が一切を解決できると信じています。例えば、ファウストが私と血を口に塗って盟約を結び、魂を売る契約をしたようにね。これは双方ともなんと上品なのでしょう！（中略）

あなたもご存知のように、私は魂の商売をしております。人類の魂は、一部が神に選ばれ、その他は全部私のところに來ます。ですが、全く誰が想像し得たでしょう、この何十年かというもの、商売あがったりで、からっ風食らうなんてね。これまで人類の魂には善悪の別がありました。善の魂が神のもとに召されて保存され、悪の魂を私が売り買いするんです。ですが十九世紀中葉になって、突然大変動が起きました。ごく少数を除いて、人類にはほとんど魂なんてなくなってしまったんです。

中国は 1840 年から二年にわたってイギリスと戦いを交えている。阿片戦争である。その後もアロー戦争（1856 年）、清仏戦争（1884 年）、日清戦争（1894 年）と続いて西欧列強および日本に敗北を喫した。十九世紀中葉とは、中国にとって被侵略という屈辱の歴史の始まりを意味する。十九世紀末から二十世紀

初頭は帝国主義の時代であり、アフリカや太平洋諸島を領有するだけでは飽き足らなかった欧米列強は、中国の利権を争奪せんと次々に侵出してきていた。銭鍾書が「魔鬼夜訪」を執筆する1939年まで、中国の各地がドイツ、ロシア、フランス、イギリス、日本によって租借されている。

この悪魔の一段のセリフには、人類の歴史に対する痛烈な批判が籠められていよう。悪魔の軽妙な語り口の裏には、利権の獲得を目的として殺戮し合う戦争という行為など愚の骨頂であるという明確な軽蔑の眼差しと認識が示されているのだ。悪魔の口を借りて、ファウストとの血の結約を「上品」と言い切る銭鍾書の眼には、人間の愚かしい行為は悪魔ですら及ばないほどであると映っていたのだろう。

「人類にはほとんど魂なんてなくなってしまった」と軽い口調で重い内容を語る悪魔は、続けて卑近な例を挙げ、又も知識人に向けた嘲笑の矢を放つ。

詩人といった連中も、私を非常に失望させていますよ。彼らはいつも魂を表現するなんて言っているが、魂を全部表現し尽くしてしまって、私にはちょっとも残してくれないんですから。

当時、西南聯大には新詩人が多くいた。例えば中国文学系の教授聞一多、彼は詩集『紅燭』（1923年）を、『死水』（1928年）を世に問うてから、象徴派の詩人として活躍していたし、同じく中文系の陳夢家は新月社のメンバーであり、『夢家詩集』（1931年）や『鉄馬集』を出版している。外国語文学系では、筆頭に挙げられるのが魯迅に「中国で最もすぐれた抒情詩人」と評された馮至（本名馮承植）⁽²⁸⁾である。彼は『昨日之歌』（1927年）、『北游及其他』（1929年）などを出版している。又、卞之琳は難解な抒情詩集『三秋集』（1933年）や何其芳・李広田との合集『漢園集』（1936年）を出版しており、上記の面々のような新詩ではなかったが、銭鍾書の師呉宓も『呉宓詩集』（1935年）を出している。その他にも、当時の文人・知識人のあり方に鑑みれば、詩集の刊行には至らずとも詩作を行っていた者は多かったに違いない。

詩人は教師陣だけにとどまらない。当時、西南聯大には幾つも詩の文芸サークルがあり、その中の一つ南湖詩社のメンバーであった外国語文学系の学生査良錚は、39年5月『中央日報』副刊『平明』に穆旦の筆名で長詩「一九三九年

火炬行列在昆明」を發表している。彼は後に 1940 年代に活躍した「九葉派」の代表詩人となる。学生詩人には、他にも趙瑞蕪や九葉派の鄭敏、杜運燮、袁可嘉⁽²⁹⁾らがいる。

西南聯大のこうした豊かな詩人層を目の前にして、錢鍾書の「魂を表現するなんて言っていないながら」云々は、軽い揶揄のつもりであったとしても彼らへの相当辛辣な嫌味となっていたに違いない。しかし、既に挙げたように、錢鍾書自身も旧詩の詩作を行っており、その意味から言えば、悪魔の揶揄は自身にも向けられたものとなる。錢鍾書の皮肉や毒は、決して他人のみに向けられたものではなく、ややもすると自己否定や自嘲へとつながり得るものだと言えるだろう。

こうして悪魔は、「私」に一通り話し終えると、「おやすみなさい」と告げ、夜の闇の中にとけるようにして去って行った。散文「魔鬼夜訪」も同時に終わりを迎える。

以上、見てきたように、散文「魔鬼夜訪」には執筆時 1939 年ならではの時代背景や、錢鍾書自身が置かれていた状況、人間関係が如実に反映されているのである。ここで注目すべきは、錢鍾書の同僚であった周囲の作家・知識人への態度及び彼を取り巻く人間関係ではないだろうか。錢鍾書の作家・知識人諷刺は、結果的に錢鍾書自身をも含むことになるとは言え、そう受け取らない読み手もいたであろう。先に挙げた施蛰存の回想にあるように、錢鍾書は決して人当たりの良いタイプではなかったようであるし、加えて気遣いの全くない、却って皮肉や当てこすりを多く含んだ散文に、不快感を覚えた者もいたはずである。特に彼の西南聯大の同僚達の中に、彼を快く思わない者がいたとしても全く不思議ではない。錢鍾書の散文に直接不満を表した批評などの資料は、現在の所見当たらないが、散文に含まれた毒に当てられたか、或いは錢鍾書の学生からの人気に嫉妬したか、当時、錢鍾書の同僚からの人物評価は高くない。例えば、外国語文学系主任であり、清華大学時代の錢鍾書の恩師である葉公超は、錢鍾書の学生時代は彼の才華を高く評価し⁽³⁰⁾、お互い親しく付き合っていたものの、西南聯大ではその親しい関係を冷たいものに変えてしまった。錢鍾書の清華時代の同級生常風は、次のように振り返る。

葉先生がまだ西南聯大にいらした頃、一回手紙の中で「今聯大に余っている教授ポストは、錢鍾書のために残しておいてある」と言っていた。私は錢鍾書に手紙を書いた時に、そのことに触れたのだが、彼の返信には「まさか僕に、毎日三食の際は葉公超に感謝の祈りを捧げさせようって言うのかい？」とあった。錢鍾書の葉公超に対する態度はどうしてこんなに変わってしまったのか、私は全く不思議であった。二人は元々仲が良かったのに、どうしてこのようになってしまったのか？⁽³¹⁾

錢鍾書の散文がきっかけで関係が悪化したのか、それとも人間関係の悪化が錢鍾書に棘や毒をふんだんに盛り込んだ散文を書かせたのかは定かではない。西南聯大で実際に何があったのかを語る資料はなく、現在では推測するしか術はないが、いずれにしても、錢鍾書は先輩同僚から疎まれることになる。葉公超と同様に、錢鍾書の清華大学時代の恩師でもあり、西南聯大の同僚でもあった吳宓の1940年3月8日の日記には「超（葉公超）とF.T.（陳福田）が梅（梅貽琦、当時の学長）に進言したと聞いた。彼らは錢鍾書らに不満なのだ。全く公平さとか才能を愛するとかいうことのない連中だ。不快なり。」⁽³²⁾とある。この引用からは、錢鍾書は学期の途中で既に、同じ外国語文学系の先輩同僚達との関係がこじれていたことが読み取れよう。

吳宓自身は、「魔鬼夜訪」を読んで「まるでヴォルテールやファウストの対話を読んでいるみたいだ」と賞賛したという⁽³³⁾。吳宓は錢鍾書の文章に込められていた毒は気にせず、或いは気付かず、上掲の日記の記述からもわかるように、錢鍾書の才能を高く評価し、敬服していたのである。

「魔鬼夜訪」は悪魔と錢鍾書の対話の形式を採っているが、畢竟錢鍾書自身の個人的感懐を述べているものである。悪魔の見解は錢鍾書自身の見解であり、悪魔と錢鍾書との深夜の対話は錢鍾書の内的対話なのである。つまり、「魔鬼夜訪」における悪魔の存在は、錢鍾書の本音のメタファーであると言えるだろう。錢鍾書は作品中、悪魔に対して何も知らずに教を請う「私」を装うことで、戦争や既存の学術や学者・文人のあり方への批判を笑いに紛らせて展開した。そして、他人を嗤うということで、結局は自分をも嗤うという姿勢をとったのである。

許淵沖は錢鍾書の用語を引いて、次のように言う。「もし自伝や別伝の人物の欠点を、ある一人の人物の身に集中させたら、悪魔が描き出せるだろう。しかし、錢鍾書先生の描いた悪魔は、決して人間の欠点を集中させてはいない。」⁽³⁴⁾ 錢鍾書が軽妙な筆致で描き出した悪魔は、人間の本质や人類の本性を照射する鏡であったと言えよう。尤も、当時の読者達、特に西南聯大の錢鍾書の同僚の面々には、メタファーや軽妙な筆致など無効化されて、本音のみ直截に届いていたのかもしれない。

4. 西南聯合大学「辞職」——結びに代えて

錢鍾書は西南聯大に半年ほどしかいなかった。39年6月17日、大学内の人事委員会第二回会議において、錢鍾書を教授として継続任用することが決定されている。しかし、錢鍾書は10月に西南聯大を辞し、湖南省藍田の国立師範学院に職を得ている。錢鍾書のこの辞職に関しては、当時西南聯大において随分と非難の対象になったようである。と言うのは錢鍾書はこの年7月、休暇を利用して、妻や母が当時暮らしていた上海に戻ったのだが、昆明に戻って西南聯大や外国語文学系の同僚に辞職の旨を告げることなしに、直接藍田へ行ってしまったのである。学長梅貽琦が昆明に戻るように電報を送ったが、郵便事情の都合で何か事故があったのか、錢鍾書はこれを受け取らず、大学の秘書長沈履からの電報を受け取った妻楊絳が錢鍾書に知らせて、やっと行き違いがあったことが明らかになり、それを受けて錢鍾書は12月5日に梅貽琦と沈履に謝罪の書状を送っている⁽³⁵⁾。

錢鍾書は何故、西南聯大を辞したのだろうか。妻楊絳の回想によれば、これには錢鍾書の父親の強い要望があった。当時、父錢基博は国立師範学院の中文系主任を務めていたのだが、新規に外文系を立ち上げるに当たり、外文系主任として息子呼び寄せたのであった。病気がちだった錢基博は、長男錢鍾書を傍に置くことで心強さを覚えたかったようである。楊絳は次のように回想している。

鍾書が仮にこのように“高い地位にのし上がろう”と汲々としていたとしても、国立清華大学と湖南藍田の師範学院とのレベルの差を知らないほど

愚かであったわけではない。鍾書は自身の困窮を隠そうとはしなかった。

しかし、家の者は誰もそれに取り合わず、誰も一言も言わず、ただ全体一致で彼は当然藍田へ行くものだと思います、全体一致で厳粛なる沈黙を守ったのだった。(中略) 鍾書は家族の圧力の下、協力せざるを得なかった。⁽³⁶⁾

銭鍾書は系主任の葉公超に書信を送り、病気がちの父親の傍にいるため今学期は授業が出来ない旨を伝えた。この段では銭鍾書には明白な辞意はなかったようである。葉公超からの返事はなく、それを「自分は清華を辞めたことになるのだろう」と解釈した銭鍾書は、10月に藍田へ赴いたのであった。楊絳は「彼は葉先生のみの手紙を書き、梅学長には書かないなどということをするべきでなかった。これは彼の過失である。」と言っている。この楊絳の回想は1999年5月に書かれたものであり、よしんば彼女の記憶力が確かだとしても、六十年という時間を経過した記憶は、いくらか修正されたものとしてとらえる必要がある。楊絳はこの回想を「息子としては、責任を父親に押し付けることを望まなかったのだ。しかも彼自身、確かに“毅然として湖南へ行った”のである。鍾書はこのような状況の下、西南聯大を離れたのであった。」と締めくくっている。

銭鍾書の梅貽琦への書信には次のようであった。

7月中匆匆に上海に戻りましたので、辞意をお伝えするのが間に合いませんでした。粗相怠慢の罪は逃れようもございません。又、当初は私も休暇明けには昆明に戻りまして、当分教育に従事するつもりでおりましたため、衣料・書籍は全てまだ昆明にございます。人事の采配の結果、結局私めが徳を為しても最後まで徹底できぬ小人となってしまうなどどうして予想できたでしょうか。9月末、何度もお手紙を差し上げようと思いましたが。母校の庇護の徳や諸先生及び芝生(馮友蘭)先生が私めを抜擢任用して下さいました恩を思いますと、赤面し背に冷や汗を覚え、口を開くことすら恥ずかしく感じるほどでございます。⁽³⁷⁾

この書信の日付は39年12月5日である。一方、西南聯合大学常務委員会の会議録には、銭鍾書の辞職に関する記事はない。しかし、銭鍾書の梅宛での書信より半月ほど前になる同年11月21日の会議記録には「決議事項」として、

次のようにある。

本学の職員で、何らかの理由により辞職し本学を離れる者は、事前に後任者探しが行えるように、一ヶ月前に本学の各担当責任部署に知らせ、許可を仰がねばならない。⁽³⁸⁾

これが、錢鍾書の辞職の際、彼自身の思い込みのせいで西南聯大側の不興を買ったことを直接指すという証拠はない。しかし、錢鍾書の「辞職」に際して、本人や家族と大学側との間に相当やりとりがあったらしいことや、錢鍾書自身が学長梅貽琦に書状で謝罪していることを併せ考えれば、錢鍾書の辞職の一件も含まれると考えても、あながち牽強付会とは言えまい。

錢鍾書は西南聯大辞職後、1941年12月に上海開明書店から「開明文学新刊」の一冊として散文集『写在人生边上』を刊行した。収録作品は「魔鬼夜訪」を一篇目として、「窓」、「快樂を論ず」、「笑いについて」、「食事」、「イソップ寓話を読む」、「教訓について語る」、「一つの偏見」、「文盲を釈す」、「文人を論ず」である。うち四篇は、前述のように西南聯大時代に『今日評論』に発表したものであった。錢鍾書はこの散文集に「人生は一部の大書であると聞く。」で始まる自序を付した。「もし人生が一部の大書であるならば、以下の何篇かの散文は人生の余白に書かれたものであるに過ぎない。この（人生という）本はなんと大きいことか！わずかの時間で読み終わるのは並大抵のことではなく、書き込まれた余白もまだまだたくさん空白部分が残っているのだ。」

柯靈は錢鍾書の創作について、次のように述べている。

錢鍾書の創作の基調は諷刺である。社会、人生、心理、道德面の病的状態、全てが彼の鋭い観察力から逃れられない。彼の魔法の杖のような筆は、鋭利でありながら機智と洒落っ気に富んでおり、尽きせぬ笑いの種とユーモアを滾々と進らせているのだ。心の内でのみ思って口には出さない批判や、悲しむべき、恨むべき、卑しむべき核を内包しており、冷たい中に熱さを有し、熱さの中にも冷たさを孕んでいる。喜劇性と悲劇性が入り乱れて離れ難く、嬉しければ笑い、怒れば罵るという風で、「道是无情却有情」（「情が無いことが却って情有る」）の意。劉禹錫の楽府「竹枝詞」に見える。：杉村注）なのである。⁽³⁹⁾

この柯霊の錢鍾書作品評は、創作全般にわたっているが、「魔鬼夜訪」を始めとする散文にも確実に当てはまる。

錢鍾書の「鋭利でありながら機智と洒落っ気に富ん」だ筆は、学生時代に発表した書評に既にその胚胎が見え、西南聯大時代に花開いた。しかし「魔鬼夜訪」の段階では、自己と対話をし、自己の内部へ向けていたはずの人性批判・文人知識人諷刺は、発表当時、他人には自己省察に立脚したものとは受け取られず、外にのみ放たれた毒として理解されてしまった。錢鍾書のこうした毒が敷衍・昇華されるには、長篇小説『困城』の登場を待つことになる。抗戦終結直後の1946年2月、雑誌『文芸復興』において連載を開始した長篇小説『困城』こそ、錢鍾書の「機智」と「洒落っ気」と自己省察の鮮やかな顕現であった。

(1) 丸尾常喜著『魯迅「野草」の研究』東京大学東洋文化研究所 平成9年3月。訳文は本書に拠り、『影的告别』の作品解釈に関しても参考にした。

(2) ゲーテ作、相良守峯訳『ファウスト 第一部』岩波文庫 1958年3月。また、同書第二部（岩波文庫 1958年3月）も参考にした。

(3) 錢鍾書、字は黙存、号は槐聚。1910年11月～1998年12月。作家・学者。著書に長篇小説『困城』、古籍研究論著『管錐編』などがある。拙論「一九四〇年代における錢鍾書——文人・知識人諷刺のゆくえ」（『言語文化論叢』第8号 2004年3月 金沢大学外国語教育研究センター）に詳しい。

(4) 錢鍾書著『写在人生边上』中国社会科学出版社 1990年5月。以後、『魔鬼夜訪』だけでなく、『写在人生边上』収録の自序の引用も全て本書に拠る。

(5) 日本において、「散文」とは「韻文」との対義語としてとして用いられることがほとんどだが、中国の「散文」は詩歌・戯曲・小説と並ぶ文芸の一ジャンルである。随筆や雑感のみならず、批評、ルポルタージュ、日記をも含む形式の自由な文章を指す。小説などとの区別は、散文は基本的に「真実」を書くものとの認識にある。例えば、小説の一人称「わたし」は作者自身とは解釈されないのに対し、散文の「わたし」は作者自身であると見なされる。「真実」を書いているはずの錢鍾書のこの散文「魔鬼夜訪」の中に「悪魔」が登場するのは、当然創作上の芸術的加工であろう。フィクション的散文としてとらえることが出来るかもしれない。以上、中国の「散文」の定義に関しては『中国大百科全書・中国文学Ⅱ』（中国大百科全書出版社 1992年4月）に基づく。『集英社世界文学事典』（集英社 2002年2月）の

笈文生執筆「散文」の項も参考にした。

(6) 錢鍾書の軌跡に関しては、以下を参考とした。孔慶茂著『錢鍾書伝』（江蘇文芸出版社 1992年1月）、孔慶茂著『錢鍾書家族文化史・丹桂堂前』（長江文芸出版社 2000年9月）、張文江著『营造巴比塔的智者・錢鍾書伝』（上海文芸出版社 1993年12月）、李洪岩著『智者的心路歷程——錢鍾書的生平与學術』（河北教育出版社 1995年5月）、湯晏著『民国第一才子錢鍾書』（台湾時報文化出版社企業股份有限公司 2001年12月）、湯溢澤著『透視錢鍾書』（湖南人民出版社 2006年5月）。

(7) 西南聯合大学に関する記述は、西南聯合大学北京校友会編『国立西南聯合大学校史——一九三七年至一九四六年的北大、清華、南開』（北京大学出版社 1996年10月）、清華大学校史研究室編『清華大学九十年』（清華大学出版社 2001年4月）、楠原俊代著『日中戦争期における中国知識人研究——もうひとつの長征・国立西南聯合大学への道』（研文出版 1997年2月）に拠る。

(8) 齊家瑩編『清華人文学科年譜』清華大学出版社 1999年1月

(9) 吳宓著、吳学昭整理注釈『吳宓日記VI・1936~1938』生活・読書・新知三聯書店 1998年3月

(10) 施蛰存「滇雲浦雨話從文」（方舟、雪夫主編『東方赤子・大家叢書：施蛰存卷』華文出版社 1999年1月）に「しばらくして、私は大西門内の文化巷に引っ越した。呂叔湘と同室であり、陳士驥、錢鍾書とは同じ階、羅廷光、楊武子とは同じ棟であった。」とある。

(11) 孔慶茂著『錢鍾書伝』江蘇文芸出版社 1992年4月

(12) 許淵沖「錢鍾書先生及訳詩」（『錢鍾書研究』第二輯 文化芸術出版社 1990年11月）

(13) 沉冰「許淵沖眼中的錢鍾書」（沉冰主編『不一樣的記憶——与錢鍾書在一起』当代世界出版社 1999年8月）

(14) 許淵沖著『追憶逝水年華』生活・読書・新知三聯書店 1996年11月

(15) 同注(12)

(16) 照春、高洪波主編『中国作家大事典』（中国文聯出版社 1999年11月）によれば、嚴文井は1938年に延安に赴き、延安魯迅芸術学院の教師をしていた旨の記述がある。

(17) 『今日評論』に関しては、周葱秀・涂明著『中国近現代文化期刊史』（山西教育出版社 1999年3月）に拠る。又、水羽信男「昆明における抗戦とリベラリズム

ム」(石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会 2004年12月)を参考とした。

(18) 注(12)前掲文に「後に、『中央日報』副刊に黙存の「魔鬼夜訪錢鍾書先生」が発表された」とある。

(19) 『中央日報』と当時の雑誌・新聞に関しては、馮并著『中国文芸副刊史』(華文出版社 2001年5月)に拠る。

(20) 蒙樹宏著『雲南抗戦時期文学史』雲南教育出版社 1998年4月

(21) 光遠「片断的回憶」(『聯大八年』西南聯大学生出版社 1946年)。原文未読。姚丹著『西南聯大歴史情境中の文学活動』(広西師範大学出版社 2000年5月)の引用に拠る。

(22) 錢鍾書著『槐聚詩存』生活・読書・新知三聯書店 1995年3月

(23) 劉中国著『錢鍾書 20世紀的人文悲歌』上巻(花城出版社 1999年9月)の引用に拠る。「文人を論ず」小序は原文未読。

(24) 趙瑞蕪著『離乱弦歌憶旧游——從西南聯大到金色的晚秋』(文匯出版社 2000年5月)に次のようにある。「1938年秋、(中略)その頃、学校は昆明の郊外の会館や多くの高校、専門学校の校舎を借りて、教室やら事務室、学生教職員用宿舎などにしていた。」

(25) 李洪岩・范旭命著『為錢鍾書声辯』(百花文芸出版社 2000年1月)に朱建国『不与水合作』208ページからの引用として紹介されている。原文未読。

(26) 李洪岩「呉組細暢論錢鍾書」(羅思編『写在錢鍾書边上』文匯出版社 1996年2月)

(27) 注(3)前掲拙論および拙論「錢鍾書の『猫』をめぐって——知識人としての自負自尊と自嘲自虐のはざま——」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第22号 2003年4月)参照。

(28) 但し、馮至は1939年8月に西南聯大に着任しており、錢鍾書の在職期間とは直接は重ならない。尤も彼の赴任は6月には決定していたため、錢鍾書は当然彼の教授着任を知っていたであろう。馮至の赴任決定及び着任の時期に関しては、注(21)姚丹前傾書に拠る。

(29) 西南聯大の学生詩人達に関しては注(21)姚丹前掲書、杜運燮・張同道編選『西南聯大現代詩鈔』(中国文学出版社 1997年10月)、游友基著『九葉詩派研究』(福建教育出版社 1997年8月)を参考とした。

(30) 清華大学在学時、葉公超は自らが主編を務めていた雑誌『新月』、『学文』に

銭鍾書の文章を発表させているし、注(6)湯晏前掲書は、葉が「銭鍾書と呉世昌を高く買っていた」との楊聯陞の回想を引用している。楊聯陞の回想「追懷葉師公超」（『伝記』1983年版）は原文未読。

- (31) 常風「和銭鍾書同学的日子」（韓石山主編『和銭鍾書同学的日子』陝西人民出版社 2007年7月）
- (32) 呉宓著、呉学昭整理注釈『呉宓日記Ⅶ・1939～1940』生活・読書・新知三聯書店 1998年6月。尚、引用文中の括弧内注釈は筆者による。
- (33) 同注(12)
- (34) 同注(14)
- (35) 黄延復著『清華逸事』遼海出版社 1998年9月
- (36) 楊絳「銭鍾書離開西南聯大的实情」（『楊絳文集・第三卷 散文卷（下）』人民文学出版社 2004年5月）
- (37) 同上
- (38) 北京大学・清華大学・南開大学・雲南師範大学編『国立西南聯合大学史料』第2巻「會議記録巻」雲南教育出版社 1998年10月
- (39) 柯靈「銭鍾書の風格与魅力——読『困城』『人・獸・鬼』『写在人生边上』」（『読書』1983年第一期）

【附記】

本稿は平成19年度科学研究費補助金の交付を受けた若手研究(B)「1940年代文学に見る“中国近代”の隘路」（課題番号19720077）による研究成果の一部である。

【補記】

注(18)に関し、平成20年2月20日、中国国家図書館（中国・北京）縮微文献閲覧室において、1939年5月15日から9月30日までの『中央日報』昆明版を調査したところ、副刊を含め全紙面に銭鍾書の文章は掲載されていなかった。許淵沖の記憶が正しければ、39年10月以降の『中央日報』昆明版に掲載された可能性も否定できないが、銭鍾書は39年7月中に上海に帰り、10月には上海から湖南に移動しているため、実のところその可能性はあまり高くないだろう。目下考えられるのは、『中央日報』昆明版以外の新聞に掲載されたのではないかということである。今後、更に調査を続けていきたい。